

「その」「あの」の使い分けの年代差 ——その原因の心理学と言語学からの考察——

水野りか*・柳谷啓子**

1. はじめに

数年前、学生との会話の中で、

学生：「あの人が教えてくれたんです。」

私：「『あの』人って誰のこと？」

と聞き返すようなことがよく起こった。そして、最近の若者の「その」、「あの」の使い方が私と異なるのではないか、指し示したい名詞が相手にとって未知か既知かなどお構いなく、自分が知っていれば「あの」を使用するのではないかと漠然と考えた。そして、学生が読むことも期待して、筆者は水野（2001）に次のように記した。

例① A君：B君，山田一郎先生を知ってるかい？

B君：いいや，ぜんぜん知らない。

A君：その先生はね，心理学を専門にしているおもしろい先生なんだよ。

例② A君：B君，山田一郎先生を知ってるかい？

B君：ああ，よく知ってるよ。

A君：あの先生がね，心理学って何かがわかるおもしろい本を出すそうだよ。

文法的には、「その」も「あの」も単なる指示詞だが、例①では「その」、例②では「あの」と、使い分けられている。これが逆だと、どのような感じがするだろうか。話し手のことを、人の言うことをきちんと聞いていない、変な人だと感じるのではなかろうか。

この例は、話し手が、聞き手がある対象を知っているか否かで言葉を使い分けしていることを端的に示している。人間が実際に話したり理解したりする際に使用する法則は、いわゆる文法以上のものであり、紙に書かれた文の構造からだけでは十分理解できない場合が多い。そして、その法則には、話の前後の文脈や、話し手の目的や意図、そして、聞き手の知識や態度などの、様々な要因が関与している。

（水野，2001，一部改変）

*人文学部教授－認知心理学・認知科学

**人文学部教授－社会言語学・英語学

一般に、聞き手に既知の事象を指し示す場合は、「あの」を用いて聞き手の知識を喚起する（外界指示）。一方、聞き手に未知の事象を指し示す場合は、聞き手の知識を喚起することはできないため、進行中の会話内容を指し示すために、「その」を用いる（文脈指示）。つまり、指示詞を正しく使うためには、文法ではなく、聞き手の知識状態を正しく推定する必要があるのである。したがって、最近の若者が指示詞の使い方を「誤る」のは、聞き手の知識状態を正しく推定する能力が不足しているためである可能性もある。

言語運用を初めて心理学的観点から分析した Clark (1993) は、会話とはお互いを理解するために協力することだとし、お互いを理解することとは、知識の「共通基盤 (common ground)」を構築することだと定義した。知識の共通基盤を構築するには、聞き手が何を知り、何を知らないかを会話の中で見極め、それを補う情報をお互いに与え、与えられる必要がある。実際、人との会話（意思疎通、コミュニケーション）が難しい自閉症児の場合は、指示詞を正しく使ったり理解したりすることが難しいとされる。田中・神尾 (2007) は、この原因が、自閉児の話し手と聞き手と指示対象という 3 者の物理的な関係を考慮する力が不十分であることに加え、話し手と聞き手の共有信念や記憶を推測・考慮すること (mentalizing; Happé & Frith, 1996) が困難なことにあると指摘している。

それでは、最近の若者は、指示詞だけではなく、会話も円滑に行うことができないのだろうか。そうは思えない。彼らは常に携帯電話で誰かと会話をしている。一人で歩きながらも、携帯電話で誰かと話をしている。話ができないときは、携帯電話でメールを打っている。へたをすると信号待ちの車の中ですら、メールを打っている。

ここまで考えたとき、ある仮説が頭に浮かんだ。次節ではまず、その仮説を紹介する。

2. コミュニケーション・メディアの変化とその影響

2.1 コミュニケーション・メディアの変化

以前は会話は、直接会ってするか電話でするかいずれかであった。電話も固定電話ばかりであったため、今ほど頻繁に利用されていたわけではない。また、手紙は書いて送って届くまで時間がかかるため会話がわりに用いられるようなことはほとんどなかったと思われる。

ところが、1995 年頃からは、インターネットの普及（総務省、2007）で、パソコンでメールやオンラインのチャットを利用するようになった。また、携帯電話が爆発的に普及し（社団法人電気通信事業者協会、2007）、直接会って話すよりも、携帯電話で会話するか、会話の代わりに即座に届くメールを利用する頻度の方がはるかに多くなった (Figure 1)。

やや古いが、2003 年度の愛知県消費生活モニター調査（愛知県中央県民生活プラザ、

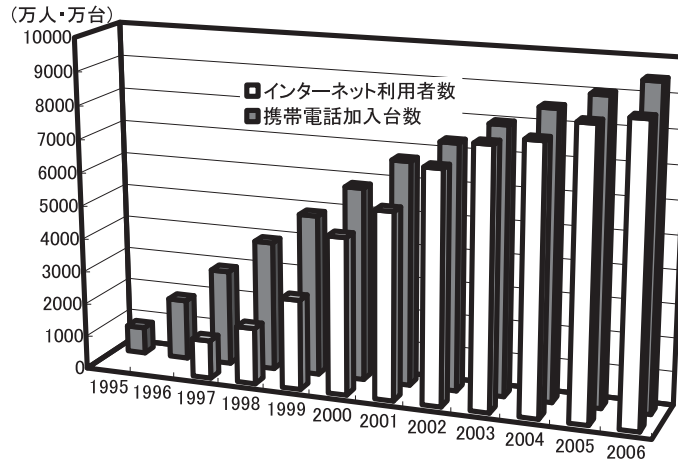


Figure 1. インターネット利用者数と携帯電話加入台数
(総務省, 2007 及び (社) 電気通信事業者協会, 2007)

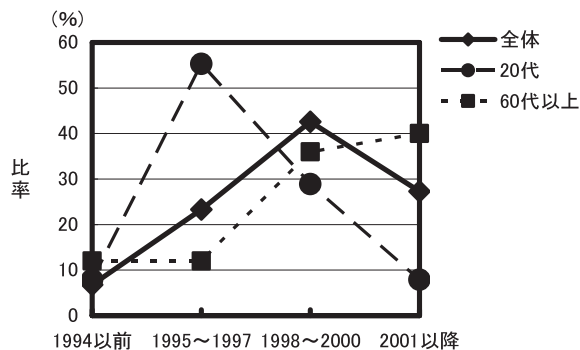


Figure 2. 携帯電話を所持した時期
(愛知県中央県民生活プラザ, 2003)

2003) では、携帯電話または PHS の所有率は、20 代では約 86.4%，30～40 代では約 75%，50 代では約 60%，60 代以上は 28.4% と、若い人ほど高かったとされる。2007 年度現在の所有率はこれよりさらに高いと推察され、実際、平均年齢 18 歳の中部大学人文学部心理学科の 2006 年度の入学者の約 96%，2007 年度の入学者の約 98% が携帯電話を所有していた。所持し始めた時期は Figure 2 に示すとおりで、全体では 1998～2000 年が最も高かったのに対し、20 代では 1995～1997 年が最も高く、半数以上が普及し始めたのとほぼ同時に購入したことがわかる。2003 年の時点の 20 代は 1997 年の時点ではまだ 14.5 歳～24.5 歳であったことを考えると、高校入学前後から携帯電話を所持し始めた者も多かったことになる。そして、こうしたコミュニケーション・メディアの大きな変化が、若者の言語運用に何らかの影響を及ぼした可能性は高いのではないだろうか。

3. 調査

ただし、冒頭に書いた若者の「誤用」の傾向は、筆者の 1 人の直感ではなく、また、大学教員である筆者が最も多く接するのは、若者である。したがって、コミュニケーション・メディアの変化の影響を議論する前にこうした「誤用」が若者に特有なものか否かを客観的に調査する必要があると考えた。

そこで本研究ではまず、各年代に「その」、「あの」の使用に関する調査を実施し、この現象が若者に特有なものか否か、年代差があるとすればどのようなものなのかを明らかにしようと考えた。

3.1 方 法

被調査者

15 歳～69 歳の 308 名。内訳は、15 歳～19 歳が 38 名、20 歳～24 歳が 82 名、25 歳～29 歳が 24 名、30 歳～34 歳が 17 名、35 歳～39 歳が 32 名、40 歳～44 歳が 28 名、45 歳～49 歳が 37 名、50 歳～54 歳が 24 名、55 歳～59 歳が 9 名、60 歳～64 歳が 10 名、65 歳～69 歳が 7 名であった。

調査日

2007 年 5 月 31 日～8 月 5 日。

質問項目

質問項目を選定するために、2007 年 4 月 17 日～5 月 25 日に 15 歳から 69 歳までの 106 名の被調査者を対象に「その」が想定される 6 項目と「あの」が想定される 6 項目の計 12 項目の質問紙による予備調査を実施した（これ以下、心理学的記述の部分では、想定される回答を便宜上「正答」と呼ぶ）。前者と後者の各々で、項目を要因とした 1 要因分散分析を行い、他の項目と回答傾向が有意に異なった各 2 項目を除外し、Table 1 に示す「その」が正答の 4 項目と「あの」が正答の 4 項目の計 4 項目を選定した。

手続き

調査は Web で実施した。教示画面と質問画面の例を Figure 3 に示す。質問項目が被調査者毎にランダム順に 1 項目 1 画面で呈示され、被調査者は当てはまる指示詞をラジオ・ボタンをクリックして選択した。所要時間は 1 名約 10 分であった。

3.2 結果と考察

55 歳以上の被調査者数が著しく少ないため、今回の分析は、15 歳～54 歳のデータに限っ

Table 1. 質問項目

「その」が正答の質問項目	
1	A 君：B 君，秋田太郎先生を知ってる？ B 君：いいや，ぜんぜん知らない。 A 君：「 」先生はね，学習心理学を専門にしているおもしろい先生なんだよ。
2	A さん：すごく軽くて 50 グラムしかないオムニバス社の最新の携帯電話，見た？ B さん：いや，まだ見てないし，聞いたこともないなあ。 A さん：「 」携帯電話，デジタル放送も全局見えるんだって。
3	A 君：トンボリ公園ってどんな公園だか知ってる？ B 君：いいや。全然知らないし，行ったこともないなあ。 A 君：「 」公園はね，世界中のチューリップが植えられている有名な公園なんだよ。
4	A さん：福井君が乗ってるすごいバイク，見たことある？ B さん：福井君の？ いいえ，まだ見たことないわ。 A さん：「 」バイク，200 万以上するバイクで，お父さんにもらったんだって。
「あの」が正答の質問項目	
1	A 君：先週，君の親友の宮城君が，僕の家のそばのコンビニでバイトしているところ見たって話したよね。 B 君：ああ，そういえばそう言っていたね。 A 君：「 」子はどこに住んでるの？
2	A 君：白梅川に行ったことある？ B 君：あるある！何度も行ったことあるよ！ A 君：「 」川には，よく見るとたくさんメダカがいるんだよ！
3	A さん：山口さんの家に生まれたばかりのかわいい子犬がいるの。 B さん：へへへ。実は私はもう見せてもらって，抱っこさせてもらったんだ。 A さん：いいなあ。私も「 」犬，抱っこしてみたいなあ。
4	A さん：昨日の謝恩会で着ていた高知さんのドレス，すてきだったね。 B さん：うん。本当にきれいなドレスだったね。 A さん：「 」ドレス，いくらぐらいするのかなあ。

て行うものとした。

① 全体の年齢差の分析

「その」が正答の項目の年代別正答率を Figure 4 に，「あの」が正答の項目の年代別正答率を Figure 5 に示す。年代間の正答率の差を見るために 1 要因分散分析を実施した結果，「その」が正答の項目では有意ではなく ($F(7, 274) = 0.68, ns$)，「あの」が正答の項目では有意だったが ($F(7, 274) = 2.15, p < .05$)，多重比較の結果，45 ～ 49 歳の正答率と 50 ～ 54 歳の正答率に差のある傾向が認められたに過ぎなかった ($t(8) = 3.15, p < .1$)。

統計的検定では有意な差は認められなかったものの，Figure 4，Figure 5 を見るとわかるように，最大正答率と最小正答率には 20% 近い差があり，この差は我々に用法の年代差を感じさせるに充分である。そこで，ローデータを詳しく見てみると，「その」が正答の質問項目については，25 ～ 29 歳の正答率が他に比べて 10% 前後低かった。一方，「あの」が正

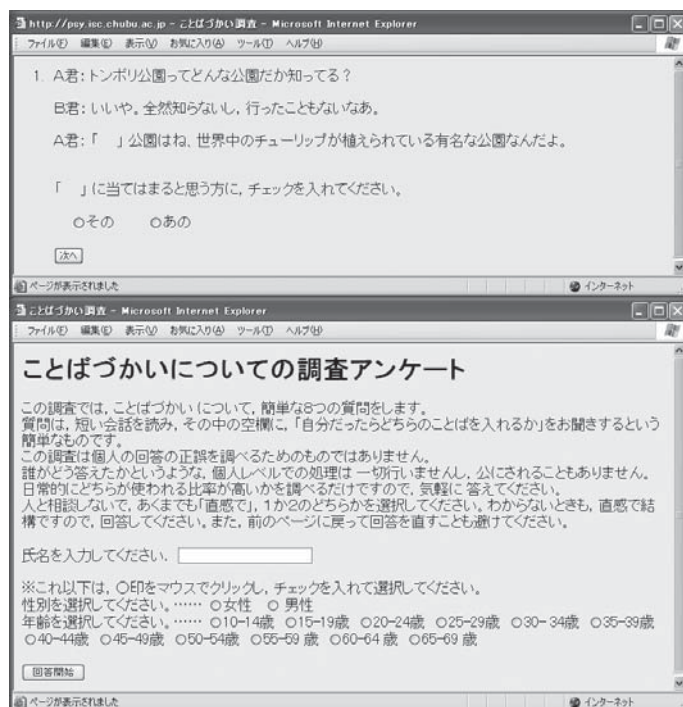


Figure 3. 教示画面と質問画面の例

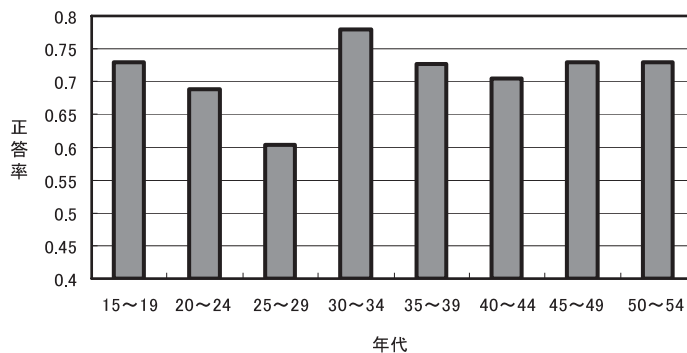


Figure 4. 「その」が正答の場合の全体の正答率

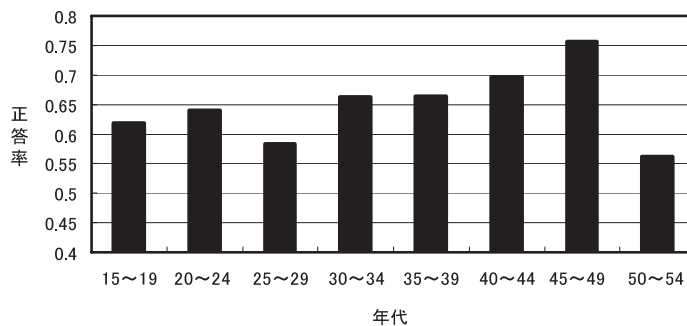


Figure 5. 「あの」が正答の場合の全体の正答率

答の質問項目については、50～54歳の正答率が最も低かったものの、やはり25～29歳の正答率もそれとほぼ等しく低かった。したがって、この25～29歳の年代に何らかの言語運用、語用の質的な違いが生じている可能性は否めないと考えられ、この点については後に詳しく考察する。

② 項目別の年齢差の分析

予備調査でも、正答率が質問項目間で若干異なっていたこと、「あの」の質問項目の年齢だけの1要因の分散分析で年齢の主効果が認められたにもかかわらず多重比較では明確な年齢差が認められなかったことから、質問項目間での正答率の差が結果に何らかの影響を及ぼしてくる可能性があると考えた。そこで、質問項目による正答率の違いも考慮すべく、「その」が正答の場合と「あの」が正答の場合毎に、項目×年齢差の混合2要因分散分析を行った（Figure 6, Figure 7）。

その結果、「その」が正答の場合は項目の主効果のみ有意で（ $F(3, 21) = 5.62, p < .01$ ），多重比較の結果、項目2のみ正答率が他より有意に高かった。この項目の正答率が高かった原因としては、携帯電話が、他の先生、公園、バイクよりもはるかに身近で理解しやすかったことが影響した可能性が考えられるが、現時点では明らかではない。

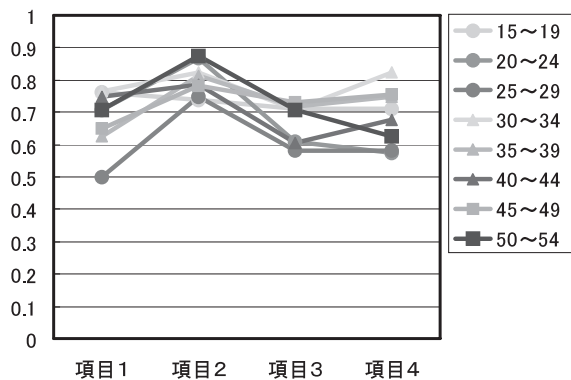


Figure 6. 「その」が正答の場合の項目毎の正答率

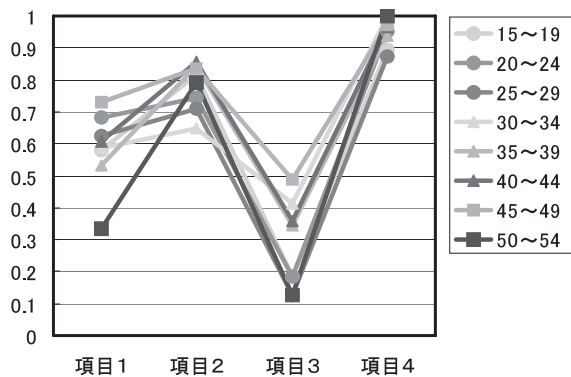


Figure 7. 「あの」が正答の場合の項目毎の正答率

一方、「あの」が正答の場合は、項目の主効果 ($F(3, 822)=146.31, p<.01$)、年齢の主効果 ($F(7, 274)=2.06, p<.05$)、及び、項目×年齢の交互作用がすべて有意だった ($F(21, 822)=1.90, p<.01$)。そこで、項目毎に年齢差を見るべく年齢の単純主効果を求めたところ、項目 1 と項目 3 で有意で ($F(7, 1096)=2.87, 3.54, p<.01$)、項目 1 の正答率は 20～24 歳及び 45～49 歳の各々と 50～54 歳との間で有意差があり、項目 3 の正答率は、15～19 歳、20～24 歳、25～29 歳、50～54 歳の各々と 45～49 歳との間で有意差があり、45～49 の正答率が高く、30 未満の若者と 50 以上の人たちの正答率が低いことがわかった。次に、年齢段階毎に項目間で正答率の差を見るべく年齢毎の項目の単純主効果を求めたところ、全年齢で項目の差が有意で ($F(3, 822)=22.23, 24.00, 22.75, 13.29, 16.54, 16.06, 9.25, 35.51, p<.01$)、各年齢段階の多重比較結果は若干違いはあったものの、全体的に、項目 1 と項目 3 の正答率が他よりも低かったことがわかった。つまり、正答率の低かった項目 1 と項目 3 で特に年齢差が著しかったことになる。

そこで、項目 1 と項目 3 の文と他の項目の文を改めて比較してみた (Table 1 参照)。項目 1 の文にも項目 3 の文にも、以下の 2 つの共通の特徴が認められた。

(1) 指し示す対象が生き物である。

(2) 指し示す対象が話し手よりもむしろ聞き手に近い関係にある。

(1) が影響したとは考えにくい、(2) が影響した可能性は高い。なぜなら、(2) が影響したならば、話し手は聞き手に近い対象を指すつもりで「その」を用いたとも考え得るからである。

ただし、現時点で結論を下すことはできない。よってこの点については、後の総合的考察で、言語学の観点からより詳しく考察する。

4. 総合的考察

調査の結果、①「その」が正答の項目の正答率は、25～29 歳が他の年代より低く、②「あの」が正答の項目の正答率は、項目 1 と項目 3 で顕著に低く、かつ、項目 1 では 50～54 歳の正答率が低く、項目 3 では 50～54 歳に加えて 30 歳未満の若者の正答率がおしなべて低く、45～49 歳の正答率が高いことが明らかとなった。

以下ではこれらの結果について、心理学と言語学の各々の観点から詳しく考察する。

4.1. 心理学的観点からの考察

①「その」が正答の項目の正答率が 25～29 歳で特に低かったことについては、冒頭で触れた、コミュニケーション・メディアの大きな変化が影響した可能性が高いと考えられる。

25～29歳の若者は、インターネットや携帯電話の利用者数の爆発的増大が始まった1995年～1997年頃、13～19歳の青年期だったことになる。この頃はちょうど、高校生あるいは大学入学直後にあたり、携帯電話や携帯メールを利用し始める時期でもあり、また、最も頻繁に利用する時期でもある。先述の愛知県消費生活モニターでの1日あたりの携帯通話と携帯メールの利用時間の年代別調査（愛知県中央県民生活プラザ，2003）では、若い世代ほどこうしたメディアの利用時間が長いという調査結果が報告されている。したがって、25～29歳の若者がこうしたメディアを最もよく利用する時期とその爆発的普及の時期は完全に一致していたことになり、この年代の若者は、どの年代の人々よりも、頻繁かつ長期にわたってこうしたメディアを利用してきたことになる。

青年期は第2次性徴の発現する12～13歳頃に始まる。この前後から始まる形式的操作期は抽象的な論理操作が可能となる時期で、青年期はその最終発達段階にあたる（山下，1982）。つまり、この頃は、言語活動を通じて抽象的思考・概念や論理性を発達させる臨界期にあたり、この時期に獲得されたそうした知的能力やそれを基盤とした言語運用能力は、終生利用されることになる。したがって、この時期にコミュニケーション・メディアの大きな変化を経験し、新しいコミュニケーション・メディアを最もよくかつ最も長い間利用してきた現在の25～29歳は、それより若くまだそれほど長くは利用してきていない24歳以下の若者よりも、言語運用の面で大きな影響を被った可能性は否めない。

また、青年期は、自我にめざめ、社会に反発し、密接な仲間関係の中で社会性を発達させる時期でもある（鈴木，1982）。ちょうどその時期に携帯電話・メールといったコミュニケーション・メディアを与えられるとどうなるのであろうか。池田（2005）は、携帯電話・携帯メールといった新しいメディアは、必ずしも対人関係やコミュニケーションを希薄化するものではないが、問題は、そのコミュニケーションが、狭い範囲の、偏った、同質の他者との一対一コミュニケーションに限定されることだと述べている。Ikeda & Kobayashi (2004) は、こうしたメディアの対人関係の偏りへの影響を調査し、こうしたメディアが若者の政治的・社会的寛容性の低さをもたらし、過度の「私生活志向」、つまり、実社会からの退避、限られた仲間とだけ強い絆で結ばれるという意味での個人主義をもたらしていることを明らかにしている。

こうした対人関係の偏りは、「その」「あの」の使い分けにも何らかの影響を及ぼしている可能性は否めない。これらの指示詞を正しく使い分けするためには、相手の知識を考慮する必要がある、それには訓練が必要であり、青年期は、その訓練の時期にあたるはずである。ところが、その相手が常に自分と同質の、限られた仲間であると、お互いの知識も似たり寄ったりで、ほとんどの場合共有されており、それを慮る必要がない。だからこそ、相手が知っている、知らないにかかわらず、「（私とあなたの知っている）『あの人』がね。」という冒頭に書いたような「誤用」が頻出するのではなかろうか。

これが事実なら、これらの若者が50代、60代となる将来は、すべての年代の日本人の正

答率は、今の 25～29 歳の若者と同程度に低くなると予想されるため、このコホート研究が必要だと考えている。

②「あの」が正答の項目の正答率が 30 歳未満で低かったことについては、①と同様、新しいコミュニケーション・メディアが影響した可能性が高い。その影響としては大きく分けて 3 つ考えられる。1 つは、新しいメディアの物理的影響である。インターネットや携帯電話を介しての会話では、話し手と聞き手の距離はかなり離れている。したがって、2 名の既知の事象は必ずしも双方から遠いところにあるわけではないので、「あの」で指し示すよりもむしろ、2 者の会話内容を指す文脈指示の「その」を利用した方が妥当な感じを受けるのかもしれない。もう 1 つは、時間的影響である。若い人ほど携帯通話より携帯メールの利用時間の方が長いと報告されている（愛知県中央県民生活プラザ，2003）。メールの場合は通話の場合とは異なり、聞き手と話し手が物理的に隔たっているだけでなく、情報の授受が時間的に隔たっている場合がほとんどである。すると、お互いの知識を推定するのが会話の場合よりも容易ではない。そのため、相手の知識を考慮してコミュニケーションをするのではなく、自分、すなわち、話し手自身の発した情報だけを指して、文脈指示の「その」を用いるのかもしれない。3 つ目は心理的影響である。先述したように、新しいメディアのコミュニケーション空間は、非常に狭く、限られている。そのような狭いコミュニケーション空間では、相手の知識喚起を促す「あの」よりもむしろ、コミュニケーションそのものを指し示す「その」を用いた方が容易なため、こちらを用いるのではなかろうか。

若者とは反対に 45～49 歳の正答率が高かったのは、この年代が最も慎重で正確な言語運用をしていることを反映しているのではないかと考えられる。文化庁の敬語に関する世論調査でも（文化庁，2006）、敬語を正しく使いたいと考えているのは 30 代、40 代が 9 割強と最も高く、敬語を大切にすべきだという意識も 40 代が 6 割近いと報告されている。このように、この年代は対人的コミュニケーションでの言語運用において慎重な態度・意識を有しているようで、これが指示詞の正確な運用にも反映されていたのであろう。

問題は 50～54 歳の正答率の低さで、少なくとも心理学的観点からの説明は難しい。よってこの点については、次節で考察する。

4.2. 言語学的観点からの考察

4.2.1. 現代日本語の指示詞ソ・アの文脈指示用法の研究の流れ

言語学的観点からの考察を行うにあたって、まず、議論の枠組みを設定するために、現代日本語の指示詞ソ・アの文脈指示用法の研究の流れを概観する。

① 話し手と聞き手の知識の有無により使い分けるとする説

日本語の指示詞コ・ソ・アに関しては、これまでに数多くの研究がなされており、本研究の対象である、いわゆる「文脈指示」のソ系列とア系列の指示詞に関しては、一般的に話し

手と聞き手の指示対象に関する知識の有無により使い分けがなされているとされてきた。

この説を唱える久野（1973）によれば、ア系列は、その指示詞の実世界における指示対象を、話し手・聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられ、ソ系列は、話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられるとしている（Table 2）。

Table 2. 話し手（S）と聞き手（H）の指示対象に関する知識の有無により使い分けるとする説

	Sは指示対象をよく知っている	Sは指示対象をよく知らない
SはHが指示対象を知っていると想定	ア系列	ソ系列
SはHが指示対象を知らないと想定	ソ系列	

この説は、以下のような例を一見うまく説明する：

例1 話し手（A/B）、聞き手（B/A）ともに指示対象をよく知っている場合

A：今朝バスの中で若山君に会ったよ。あの（*その）子に会ったの久しぶりだよ。

B：そうですね。だってあの（*その）子、最近授業に出てないもの。

例2 話し手（A）は指示対象をよく知っているが、聞き手（B）は指示対象をよく知らないだろうと想定される場合

A：友だちに山野っていうのがいるんだけど、その（*あの）男も最近離婚したらしいんだ。

B：へー。やっぱり浮気が原因？

例3 話し手（B）が指示対象をよく知らない場合

A：今朝バスの中で若山君に会ったよ。

B：えっ？誰、その（*あの）人？

指示対象に関する話し手と聞き手の知識の有無を説明原理に用いるこのような説明は、広く流通し一般的なものとなっている。明示的に教科書などで学んだ覚えのない者でも、ちょっと内省して得られる法則はこれに近いものなのではないだろうか。

ところが、以下の各例のように、聞き手が指示対象を知らない場合でも、助言・叱責・思い出語りなどの言語行為では、ア系列が用いられることが指摘されている（黒田 1979, Yoshimoto 1986, 吉本 1992）。

例4 助言

A：僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくと、きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ。（黒田 1979）

例 5 叱責

A：この本，ミラーという人が書いたそうなんですが，どこの人ですか？

B：君，あの先生を知らないのか？（吉本 1992）

例 6 思い出語り

A：B さんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか？

B：あの頃は浅草オペラの全盛時代でしてね。（吉本 1992）

吉本（1992）は，このような例は，ア系列が話し手・聞き手の知識が共有されているときに用いられることを利用したレトリック的な表現であり，ア系列の基本的用法そのものには変わりがないと考えている。「叱責」は，指示対象に関する知識が，聞き手にも共有されているというア系列の基本的意味が，共有知識をもたない聞き手に対する非難めいた口調を醸し出すのに利用されているケースであるとし，また「思い出語り」は，聞き手にも知識を共有して欲しいという，話し手の対象に対する思い入れを伝えていると解釈している。

② 話し手の指向で使い分けるとする説

いずれにせよ，話し手がよく知っている対象に関しては，聞き手に知識がなくても，基本的にはア系列を使うことが可能であることになる。黒田（1979）は，このような例を踏まえ，文脈指示用法について，「指示詞ソ・アの選択に真に本質的な要因は，話し手及び聞き手が対象を『よく知っているかいなか』ということではなく，話し手が，指示詞使用の場面において，対象を概念的知識の対象として指向するか直接的知識の対象として指向するか，ということにある」（p. 50）とした（Table 3）。

Table 3. 話し手が指示対象を概念的知識／直接的知識として指向するかで使い分けるとする説

S は指示対象を直接的知識の対象として指向	S は指示対象を概念的知識の対象として指向
ア系列	ソ系列

しかし，この「本質的な要因」は，どのような場合に「話し手が……対象を概念的知識の対象として指向」し，どのような場合に「直接的知識の対象として指向する」のかを説明しない。助言，叱責，思い出語りなど，場面によって使用可能であったり，なかったりする現象の説明は，金水（1999）を待つことになる。

③ 話し手の直接体験に基づく知識の有無で使い分けるとする説

金水（1999）は，黒田（1979）の「概念的知識」と「直接的知識」をさらに一步進め，Fauconnier（1982）に始まる「メンタル・スペース」理論，及び田窪・金水（1996），坂原（1996）等により進展を見た談話管理理論の立場から，指示詞コ・ソ・アの用法の違いを説明している。

これによれば，指示詞表現の使用の違いは，それが指定する心的な領域の違いから生じる

とされる。心的領域の概念を用いたこのシステムのうち、本研究にかかわる「文脈指示用法」のソ系列・ア系列について以下で概観する。

金水（1999）は、ア系列を使用するための必要条件は、指し示される対象が、「話し手により直接体験された過去の場面に関連づけられる対象であること」（p. 71-72）としている。つまり、ア系列の指示詞は、話し手が直接体験した過去の記憶内の場面の中の要素を指示する「記憶指示用法」しかもたないことになる。談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示して言語的文脈に取り込む「直示」用法が、いわゆる「文脈指示」にも拡張的に用いられるのだという。

一方、ソ系列は、「語彙の概念的意味、フレーム的意味と最小限の推論等によって形成される」（p. 72）言語的文脈内の要素を受ける「文脈照応用法」しかもたず、話し手にとっての外的世界とは独立に、主に言語的な表現によって談話に導入された要素を指し示すために用いられるとされる。

また、そもそもいわゆる文脈指示用法の指示詞の使用は、当然ながら、すべて言語的な表現によって談話に導入された要素を指し示すものなので、話し手・聞き手の直接的経験の知識の有無にかかわらず、いかなる場合でもソ系列は使えることになる。しかし、すでに例4から例6（助言・叱責・思い出語りでのア系列の使用）で見たとおり、これは言語使用の実態に反する。

④ 語用論的制約

この問題を解決するために金水（1999）は、以下の二つの語用論的制約と原則を導入する：

- 1) 聞き手負荷制約：聞き手が発話を処理する際にかかる負荷を最小にせよ
- 2) 直示優先の原則：直示を優先せよ

指示対象に関して、話し手に直接的知識はあるが、聞き手には十分な知識がないと想定される場合、ア系列使用の必要条件は満たされ、また、言語的文脈を提示すればソ系列の使用条件も満たされる。

ところが、「聞き手負荷制約」のため、「話し手は知識をもたない聞き手に合わせて、言語的文脈をベースにしてコミュニケーションを行うことが義務づけられている」（p. 75）。つまり、意味論の次元（特定のコンテキストを想定しない抽象的な文法規則の次元）では、ア系列でもソ系列でも使用できるはずなのだが、語用論の次元（相手とコミュニケーションをとるという特定のコンテキスト内での言語使用の次元）では、ソ系列しか用いられないことになる。

それは、ア系列で指し示したのでは、相手は自分の記憶内には存在しない場面の中を指示対象を求めて無駄に探索することになり、負担が大きくなってしまうためである。それゆ

え、聞き手が言語的文脈だけに指示対象を求めればすむように、話し手はソ系列を用いることが義務づけられているというのである。

ただし、これは語用論的制約、すなわち言語使用の次元の問題であるため、相手への負担を無視してよい場合、例えば、話し手の方が聞き手よりも十分に年長であったり、立場が上であったりする場合には適用されず、ア系列が用いられることもある。先の黒田（1979）の指摘にあった、聞き手の知識を無視したア系列の使用（助言、叱責、思い出語りなどの場合）は、これにあたると考えられる。つまり、相手に自分が所有している資源（情報やもの）を分け与える「助言する」という行為では、話し手は聞き手よりも立場的に上であり、また、相手を「叱責」する立場でも、同様に立場が上である。またさらに、思い出に耽りながら語る場合には、相手の存在そのものが眼中から消えていたとしても不思議ではない。

一方、「直示優先の原則」は、直示または直示に近い手段（拡張直示）によって対象を指示できるならば、直示、すなわちア系列の使用が優先される、というものである。話し手、聞き手ともに対象をよく知っている場合も、文法規則の次元では、ア系列、ソ系列ともに使用可能であるはずなのだが、「聞き手負荷制約」がかからない場面では、日本語話者にとって最も負荷の低い指示であるとされる直示（ア系列）の使用が優先される、というものである。

以上の制約を踏まえて、金水（1999）による文脈指示のア系列、ソ系列の使用条件をまとめると、Table 4 のようになる。

Table 4. 話し手の指示対象に関する直接体験に基づく知識の有無で使い分けるとする説

	S に直接体験に基づく知識あり	S に概念的知識のみ
S は H に直接体験に基づく知識ありと想定	① { ア系列 ソ系列（ただし「直示優先の原則」により通常は排除）	③ ソ系列
S は H に概念的知識のみと想定	② { ア系列（ただし「聞き手負荷制約」により通常は排除） ソ系列	④ ソ系列

4.2.2 調査結果の解釈

① 「その」を想定した項目：25～29 歳で「あの」の出現率が高い原因

さて、このような文脈指示のソ系列・ア系列の指示詞の使用条件に照らし合わせて、以下では本研究の調査結果の解釈を試みる。

回答に「その」を想定した項目群（Table 1 参照）では、いずれも話題の中心となる対象に関して、A が直接体験に基づく知識をもっているか否かまでは明示していないが、少なくともその対象を「よく知っている」ことは明らかである。一方、B に直接体験に基づく知識が全くないのは明らかである。また、設問文の内容からして、これらが助言、叱責、思い出語りなど、「聞き手負荷制約」の対象外となるケースではないことも明らかである。これは、Table 4 の②にあたため、空欄には、「その」が現れることが期待される。

ところが、上記 (p. 8) で見たとおり、調査では、25～29歳のグループで「その」と答えた人が他の年齢層より顕著に少ないという結果となった。これは、心理学的考察の中で推察したとおり、この年齢層が、相手の知識レベルに関係なく、自分の知識レベルだけでア系列の選択を行っている現れと考えられる。上記の金水 (1999) の理論を用いるならば、この年齢層において「聞き手負荷制約」の違反があったと説明することになる。相手の知識の有無を十分に考慮せずに、自分に指示対象に関しての直接体験に基づく知識があれば、ア系列を使用するという一方的な基準によって選択を行った結果と考えられる。

相手の知識レベルへの無配慮、すなわち「聞き手負荷制約」の違反の要因としては、次の3つの可能性が考えられる：(1) 聞き手の存在が意識上消滅してしまう「自他の同一視傾向」、(2) 聞き手の存在は認めているが、それを無視する「自己中心化の傾向」、そして、(3) 聞き手を一様に同等関係と見なす「人間関係のフラット化傾向」である。以下では、これらの可能性を順に検討する。

(1) 「自他の同一視傾向」の可能性

「自他の同一視傾向」については、上記 4.1. の「心理学的観点からの考察」で、25～29歳の年齢層におけるこのような傾向について、携帯電話・携帯メール、インターネットなどの新しいコミュニケーション・メディアの登場により、狭い範囲の、偏った、同質の他者との一対一のコミュニケーションが主流になったことが原因として考えられるとした。このような「自他の同一視傾向」自体は、他者の知識レベルに対する無配慮の要因としては確かに考えられることではある。

中村 (1994) では、すでに 1990 年代前半に 10 代の間でア系列の「自他同一視」的使用が観察されていたことが報告されている。報告事例は、直示用法に関してではあるが、聞き手のそばにある物体、したがって一般に「聞き手領域指示」と呼ばれるソ系列が用いられるべき場面であるにもかかわらず、ア系列を使用する若者がでてきたというのである。話し手が聞き手のそばにあるものを指して、「○○さん、ちょっとアノ本とつてくれない」(p. 50) というような例が若者の間に見られるようになってきたという。

このことに驚いた中村 (1994) は、1950 年以降の調査事例にあたり、1990 年代前半はおろか、実は過去 40 年ほどの間に、話し手と聞き手が離れている場合の直示的用法のソ系列・ア系列の使用分布が変化してきていることを突き止める。まず、そもそも 1950 年代では、ア系列は話し手と聞き手が接近したときのみ、現れていた。つまり、両者が合体した領域から遠いところ (のもの) を指す場合にのみ、ア系列が使われていた。その後、1970 年代初期の若年層で、離れて向かい合っている話し手と聞き手の間にア系列が出現する。そして、その「中間のア系列」が徐々にソ系列の領分に「くいこみ」、その結果、ソ系列で指し示される領域が狭まってきた。しかも、若い年齢層ほど、その傾向が強いという。かくして、1994 年の時点では、聞き手のすぐそばまでア系列が侵食していた、というのである。

さらに、中村 (1994) は、このような直示用法におけるア系列のソ系列への「くいこみ」

が、文脈指示用法にも見られるようになってきた状況も報告している。聞き手にとっては「新情報」であるにもかかわらず、話し手がア系列を選択するような、本研究のケースと同質の用法である。例えば「わたしの友達に山田さんという人がいるけど、アノ人のおとうさんが……」（p. 59）のような例が、数は少ないものの、1994 年の時点で 10 代半ばの若年層に出現していることが指摘されている。中村は、このような用法が、直示用法における「くいこみ」と深く結びついている可能性を示唆している。

このことは、一見、上記の心理学的考察の結果と矛盾する。というのも、これらの調査はすべて、まだ携帯電話などの新しいコミュニケーション・メディアが登場、あるいは普及する前に行われたものだからである。

しかし、たとえ根底にこうした言語変化のなだらかな（中村 1994 があげているコ・ソ・アの出現割合の年代差はごくわずかなものである）潮流があったとしても、今回の調査の 25～29 歳の「あの」の回答率は、10 代から 20 代前半を含む他年代より突出して多く、それゆえ、なお、何らかの説明を要するものである。

そして、その原因が、この世代が経験した新しいコミュニケーション・メディアによる劇的なコミュニケーション手法の変化、及び、それら新メディアの使用期間の長さである可能性は、十分に考えられる。つまり、ア系列のソ系列への「くいこみ」の直接の要因が何であるにせよ、それを問題の世代で増幅させた原因として、「コミュニケーション・メディアの変化時期」説をとることは矛盾しないのである。

ちなみに、コミュニケーションサービスの年齢別利用率を調査した『日本人の情報行動 2005』（東京大学大学院情報学環編 2006）によれば、年齢が若いほど利用率が高いと言えるのは、ネットゲームのみである。掲示板の読み書き、SNS、チャット、メッセージャーなどのやり取りを要するサービスでは 20 代の利用が目立ってピークを成しており、この世代が新しいメディアをコミュニケーション・ツールとして使用することに馴染みが深いことを物語っている。（一方、あまり言語を必要としないネットゲームでは 10 代が、またメールマガジンなどの一方通行のコミュニケーションサービスでは 30 代がピークである。）

いずれにせよ、「聞き手負荷制約」違反の要因を「自他の同一視傾向」とすること自体に関しては、直示用法の場合とはいえ、そもそもア系列がかつては話し手と聞き手が接近したときにのみ、現れていたことから考えても、その可能性は否定できない。ましてや、ア系列の「文脈指示」用法が、「直示」用法の拡張的用法に過ぎないとする金水（1999）の説を考え合わせれば、なおさらである。

（2）「自己中心化の傾向」の可能性

次に若者の「自己中心化の傾向」に関しては、言語使用のみならず、社会の各所で指摘されていることではあるが、こと指示詞の選択においては、この可能性は、伊藤・田中・細川（2004）により疑問視されている。

伊藤・田中・細川（2004）は、保育園児・小学生（3 歳から 7 歳）と大学生（19 歳から

23 歳)を対象に、指示詞コ・ソ・アの理解実験をもとにその発達的变化を検討したものである。直示用法のみを対象とした研究ではあるが、理解実験の結果、大学生の約 25%が、「聞き手領域」というものを想定せず、自分(話し手)からの距離によってソ系列とア系列を使い分けていることが報告されている。この割合が、社会認知的に未発達(それゆえ、自己中心的)とされる低年齢層よりも高かったことから、伊藤らは、直示用法の指示詞の選択に、従来言われてきた社会認知的な要因以外の何らかの要因が深く関与している可能性があると考えている。これは、直示用法に関する研究ではあるが、中村(1994)の言うように、文脈指示用法におけるア系列のソ系列への「くいこみ」が、直示用法の「くいこみ」と深いかわりがあるとするならば、文脈指示用法の変化も「自己中心性」以外のものに、その要因を求めるのが妥当だと考えられる。

(3)「人間関係のフラット化傾向」の可能性

3つ目の可能性は、問題の年齢層における「人間関係のフラット化傾向」である。迫田(2004)は、10人の日本人(20代から50代)に、ほぼ初対面の日本人(20代)とそれぞれ同じ話題で1時間の自由会話を行わせて、文脈指示のア系列・ソ系列の指示詞の出現頻度を調べている。その結果、20代に比べ、50代の男性の発話にはア系列の使用頻度が高く、聞き手の知らない対象にア系列を使う表現が2倍近く見られたと報告している。

50代の被調査者のこのふるまいは、金水(1999)で見たとおり、「聞き手負荷制約」が語用論的制約であり、相手への負担を無視してよい場合、例えば、話し手の方が聞き手よりも十分に年長であったり、立場が上であったりする場合には適用されないことがあるという説明とよく合致する。

一方20代の被調査者のふるまいは、一見本研究の結果と矛盾する。しかし、迫田(2004)は対面で行った調査であるため、20代の被調査者は、どうしても相手との年齢差や立場の違いを強く意識したであろうから、たとえ彼らに「人間関係のフラット化傾向」があったとしても実際の対面行動には現れなかった可能性が高い。また、被調査者の素性は明らかにされていないが、教育現場に身を置く研究者の常として、調査に参加を要請した「20代」が22歳くらいまでの学生であったことは十分に考えられる。

したがって、20代後半の年齢層において、相手との人間関係にあまりこだわることなく言語項目の選択を行う傾向があるとすれば、「聞き手負荷制約」違反の傾向の原因としては、なお有望な説明となりうる。そこで、人間関係への意識度と言語使用の間の関係を年齢層別に比較するために、平成18年度「国語に関する世論調査」(文化庁 2007)にまとめられた2007年春の状況を参照する。

同調査によれば、「敬語の使い方」に関心があると答えた回答者は、10代では60%台、20代前半で急激な伸びを示し、20代半ばで75.4%に達する。しかし、20代後半から30代前半にかけてなぜか60%台に落ち込み、40代で再度70%台に上昇する。以降50代で60%台、60代で50%台へと減少していく。20代前半の急激な伸びは、この年代で新社会人にな

ることが多いため、仕事場などでの新しい人間関係に接し、敬語の使い方を意識するようになるためだと考えられる。また、40代は、社会の中堅にあたり、仕事上の人間関係も複雑化する時期であるため、最も規範意識が強くなることが種々の研究（例えば Downes 1984, Holmes 1992 など）で報告されている。

年齢と規範意識の関係を調査したこれらの研究では、通常、20代半ばで急激な意識変化を見せた後、40代半ばに向かってさらに規範意識は高くなり、その後、50代、60代と進むにつれて、規範意識は薄れていくとされる。50代以降は社会の中核から次第に退いていく時期であり、またおおかたの人間関係が自分より年下となるため、人間関係に配慮した規範的な言語使用への意識は薄れていくものと考えられる。したがって、文化庁（2007）の調査での20代後半から30代前半にかけての敬語意識の落ち込みは、何らかの原因によって引き起こされた特殊な状況と見るべきだろう。

さらに、平成17年度「国語に関する世論調査」（文化庁2006、調査は2006年春に実施）では、日常生活で相手や状況によって、どの程度言葉を使い分けしているかを尋ねている。その結果、60代以外はおおむね「使い分けしている」との回答が90%を超えたものの、「使い分けしていない」と答えた人は、10代、30代後半、40代ではおよそ5%であるのに対し、20代後半から30代前半では7%台であり、やはり20代の年齢層で相手との人間関係による言語的配慮が薄れる傾向が見られた。

では、20代後半から30代前半で人間関係による言語的配慮が低いという結果は、これらの調査に固有のものだろうか。同類の質問項目を含む平成9年度～平成12年度の「国語に関する世論調査」（文化庁1998, 1999, 2000, 2001）の調査結果を見てみると、いずれも10代から20代に向かって急激に敬語意識が上昇する現象は2006年・2007年の調査と同じである。ところが、その後30代、40代へとそのまま敬語意識は上昇し続け、20代後半から30代前半に特筆すべきふりまは現れない。このことと、上記で検討した中村（1994）の観察から、2005年頃から現在に至る20代後半から30代前半の人口が、他の時代の同類の年齢層とは異なる特異なふりまを見せていることになる。

このことは、本調査の25～29歳の被調査者の特異なふりまを裏づけるものであると同時に、この人口における言語使用上の人間関係への配慮の欠如の傾向、すなわち「人間関係のフラット化傾向」を指し示すように思われる、ただし、なぜこの人口においてその傾向が現れるのか、コミュニケーション・メディアの変化の時期が関係しているのか否かなどは、今後の研究の課題として残る。

② 「あの」を想定した項目：項目により「あの」の出現率が低い原因

次に、回答に「あの」を想定した項目群への回答に関して考察する。項目1から4（Table1参照）は、A・Bともに指示対象に関する直接体験に基づく知識を有しているケースである。したがって、空欄へは「あの」が選択されることが期待された。結果を見てみると、項目2と4では、確かにどの年齢層でも「あの」と答えた人が大多数であった。しかし、項目1と

3では、項目2と4に比べて全般的に「あの」の回答率は低かった。

この違いは、主に設問文の内容によるところが大きいと思われる。まず、項目2（例7参照）で、Aは、2回目の発話で白梅川について直接体験による知識を披露しているところから、明らかに直接体験に基づく知識を有していることがわかる。また、Bも「何度も行ったことがある」と述べていることから、指示対象に関して直接体験を有していることが明らかである。つまり、両者ともに直接体験に基づく知識を有しており、ともに指示対象を「よく知っている」ことが明言されているわけである。このような状況においては、金水（1999）の「直示優先」の原則に則り、「あの」が選択されるのが自然であろう。

例7 =回答に「あの」を想定した項目2

A君：白梅川に行ったことある？

B君：あるある！ 何度も行ったことあるよ！

A君：あの（*その）川には、よく見るとたくさんメダカがいるんだよ！

また、項目4（例8参照）では、単にA・B両者ともに指示対象に関する直接体験に基づく知識を有しているのみならず、その体験が同じ場（昨日の謝恩会）での完全な共有体験であることが明示されている。したがって、その同じ記憶内の場面に存在する指示対象を「直示優先」の原則にしたがって「あの」で指示するのは当然のことであり、「あの」の回答率がどの年齢層でも非常に高かったこともうなずける。

例8 =回答に「あの」を想定した項目4

Aさん：昨日の謝恩会で着ていた高知さんのドレス、すてきだったね。

Bさん：うん。本当にきれいなドレスだったね。

Aさん：あの（*その）ドレス、いくらぐらいするのかなあ。

ところが、項目1と3では、事情が多少異なっている。項目1（例9参照）で、Aは指示対象に関して「見た」という直接体験をもってはいるものの、2回目の発話から察するに、その指示対象に関して「よく知っている」というほどの知識はもっていないと思われる。むしろ、指示対象はBの親友であるのだからBの方が詳しい知識をもっている。つまり、Aにとっては、Table 4における③の状況に近いと被調査者らが感じたことは十分に考えられる。したがって、「その」を選ぶ人がいたとしてもそれほど不思議ではない。これは、3.2.の②「項目別の年齢差の分析」の項で、「(2) 指し示す対象が話し手よりもむしろ聞き手に近い関係にある」(p. 8) と考察したとおりである。

例 9 =回答に「あの」を想定した項目 1

A 君：先週、君の親友の宮城君が、僕の家のおそばのコンビニでバイトしているところ見たって話したよね。

B 君：ああ、そういえばそう言っていたね。

A 君：あの（？その）子はどこに住んでるの？

さらに、項目 3（例 10 参照）では、A に指示対象に関する直接体験があるか否かは明言されておらず、単に伝聞による知識しか有していない可能性もある。それに対して B は、指示対象を「見た」のみならず「抱っこした」という直接体験を有していることが明らかである。つまり、この場合も A よりも B の方が指示対象を「よく知っている」ことになり、A にとっては Table 4 における③の状況であると解釈した被験者がいたとしてもうなずける。A が実際に子犬を目撃していると解釈すれば「あの」が選ばれ、子犬の存在を伝聞でしか知らないと解釈すれば「その」が選ばれるわけである。

例 10 =回答に「あの」を想定した項目 3

A さん：山口さんの家に生まれたばかりのかわいい子犬がいるの。

B さん：へへへ。実は私はもう見せてもらって、抱っこさせてもらったんだ。

A さん：いいなあ。私もあの（その）犬、抱っこしてみたいなあ。

③ 「あの」を想定した項目：年齢層による回答の違い

調査結果では、項目 1 において 50 代前半が他の年齢層に比べ「その」を有意に多く選び、項目 3 においては、50 代前半に加えて 30 代未満も「その」を多く選んでいる。一方、40 代後半は、項目 3 において、「あの」を選んだ人が他の年齢層に比べて有意に多かった。

設問文の内容に関する上記の検討が正しいとすれば、項目 1 では、50 代前半の回答者に話し手（A）に指示対象に関する直接的知識がないと解釈した人が多かったことになる。また項目 3 では、50 代前半に加えて 30 代未満にも同様の解釈をした人が多かったことになる。この点に関して、4.1.「心理学的観点からの考察」では、言語学的観点からの考察にその説明を委ねられた。

言語学的観点からすれば、これを単なる解釈の違いと考えるか、あるいは、話し手の「直接体験に基づく知識」の有無だけを A 系列の選択基準にする金水（1999）の説を見直す必要があるか、別途検討しなくてはならない興味深い問題ではある。しかし、ここでは立ち入ることはせず、相手と自分の直接体験に基づく知識量の差を考慮する必要性、あるいは、直示用法のコ・ソ・アの選択基準の説明で一般的に用いられる「相手領域」または「相手に近い対象」というものをメンタル・スペースにも取り込む必要性を示唆するにとどめる。

いずれにせよ、項目 1 と 3 において「あの」の回答率がどの年齢層でも顕著に低かった事実を踏まえれば、説明されるべきは、むしろ 40 代後半のふるまいであるが、ここでも、す

で述べた 40 代の規範遵守の傾向が関与していると考えることが可能である。先に述べたとおり、文脈指示の指示詞ソ・アの使い分けは、一般的には話し手と聞き手の指示対象に関する知識の有無により決まるとされている。国語・日本語教育の現場でも、そのように説明しているテキストは多数存在する。また、多少の内省により得られる基準も、それに近いものとなる。したがって、規範意識の強い 40 代（特に後半）が回答に臨んだ際に、何らかの法則を見いだそうと内省を行い、話し手（A）が指し示した対象に関して相手（B）が「知っている」か「知らない」かを「あの」「その」の選択基準にした可能性が考えられる。

実際、被調査者らが調査に回答を終えた旨を電子メールで知らせてくる際、40 代の人たちの多くは「正解」を知りたがり、また自分なりの選択基準（大多数が、聞き手の指示対象に関する知識の有無による基準）を披露し、それが「正しい」のかどうか教えて欲しいと言ってきた。このような反応を考え合わせるにつけ、40 代の人々の間で、相手（B）が指示対象を「知っている」との理由で、一律に「あの」と答えた人がいたとしても、あながち的外れな推測とは言えないだろう。

また、項目 3 においてのみ、40 代が他の年齢層と異なるふるまいを見せたことを考えれば、項目 3 における話し手（A）が、「山口さんの家に生まれたばかりのかわいい子犬がいるんだって」という規範的な伝聞体を用いていないことから、直感的に A の直接体験に基づく知識を想定し、反応したことも考えられる。いずれにせよ、この年齢層の特異なふるまいは、規範意識の強さに原因がある可能性は否定できない。

5. おわりに

本研究は、聞き手の知識を考慮して使い分ける必要のある指示詞、「その」と「あの」の使われ方の年代別調査を実施し、年代による違いや特徴、及び、その原因を、心理学と言語学の観点から探ることを目的とした。

5.1. 心理学的観点からの考察のまとめ

回答に「その」を想定した項目の正答率が 25 ～ 29 歳で特に低かったことについては、この年代が思春期に入った 1995 年頃から爆発的に普及した新しいコミュニケーション・メディアが影響した可能性が高いと考えられた。

「その」「あの」を正しく使い分けるためには、相手の知識を考慮する必要がある、それには訓練が必要である。しかしながら、インターネットや携帯電話でやり取りするのは、ほとんどの知識を共有している極めて親しい友人であることが多い。そのため、相手の知識を慮るような訓練はほとんどしておらず、自分の知っていることは相手も知っている想定し

て、「(私とあなたの知っている)『あの人』がね」という冒頭に書いたような「誤用」が頻出するのではないかと考えられた。

回答に「あの」を想定した項目の正答率が 30 歳未満で低かったことについては、「その」の場合と同様、新しいコミュニケーション・メディアが影響した可能性が考えられた。考えられた可能性は以下の 3 つである。1. 物理的影響：インターネットや携帯電話を利用する場合、話し手と聞き手の距離はかなり離れているため、既知の事象は必ずしもそれ以上に 2 人から離れたところにあるわけではない。そのため、「あの」で指し示すよりもむしろ、2 者の会話内容を指す文脈指示の「その」を利用した方が妥当な感じを受けるのではないか。2. 時間的影響：彼らが携帯電話より頻繁に利用するとされる携帯メールの場合は、聞き手と話し手が物理的に隔たっているだけでなく、ほとんど場合、情報の授受が時間的に隔たっている。そのため、お互いの知識を推定するのは容易ではないため、自分、すなわち、話し手自身の発した情報だけを指して文脈指示の「その」を用いる傾向が強くなる。3. 心理的影響：新しいメディアの作り出す狭いコミュニケーション空間では、相手の知識喚起を促す「あの」よりもむしろ、コミュニケーションそのものを指し示す「その」を用いる傾向が強くなる。

45～49 歳の正答率が高かったのは、この年代が最も慎重で正確な言語運用をしていることを反映している可能性が指摘されたが、50～54 歳の正答率が低かった原因については不明であった。本研究が、Web 調査という、まさに新しいメディアを介して行われた調査であったことも、少なからず影響した可能性は否めないと考えられた。

5.2. 言語学的観点からの考察のまとめ

回答に「その」を想定した項目群で、25～29 歳の年齢層において、「あの」を選択する率が他の年齢層より高いことは、「聞き手負荷制約」の違反であるとし、違反の要因として 3 つの可能性を検討した。

まず、「自他の同一視傾向」については、そもそもかつては、ア系列が話し手と聞き手が接近したときのみ、現れていたことから、その可能性は充分にあるとした。また、その原因として、心理学的観点からの考察と同様、問題の世代が経験した携帯電話や携帯メール、インターネットなどの新しいコミュニケーション・メディアの出現による劇的なコミュニケーション手段の変化、及び、それら新メディアの使用期間の長さが、考えられるとした。

一方、「自己中心化の傾向」に制約違反の要因を求めることは、ア系列のソ系列への「くいこみ」現象が、通常自己中心性が極めて高いとされる幼児よりも、むしろ大学生において多く見られたことから疑問が残った。

「人間関係のフラット化傾向」に関しては、通常、「聞き手負荷制約」の違反が、話し手が聞き手の知識の状態を無視しても許される立場にある場合（十分に年長である、立場が上で

ある、など）に起こることから、その可能性が強いとし、それを支持する統計資料を示した。ただし、今回の調査からはその原因までは特定できなかった。

いずれにせよ、今回の調査で明らかになった 25～29 歳の世代の言語的ふるまいは、いつの時代の同年齢層にも見られるというものではなく、現在の 20 代後半から 30 代前半の人口に特異な現象である可能性が高いことがわかった。

回答に「あの」を想定した項目群では、会話内容に複数の解釈を許す項目が含まれていたため、それらの項目では、どの解釈を選ぶかにより指示詞の選択が異なった可能性があり、その結果、項目間での「あの」の選択率が異なった可能性があるとした。ただし、解釈の違いという現象は、場合によっては、金水（1999）の理論そのものの見直しを迫るものであるかもしれないことを示唆した。

40 代における「あの」の選択率の高さの要因としては、この年齢層の規範意識の高さを提案した。

今回の調査で今後の課題として残ったのは、以下の 4 点である：

a. 「聞き手負荷制約」が相手との年齢差・立場の差にかかわる制約であることから、調査票の項目に明示的に（あるいは言葉遣いからわかるように）会話者間に各種人間関係を設定し、今回 20 代後半の世代が特異なふるまいを見せた要因をより精密に調査し、確定する。

b. その要因が「自他の同一視傾向」であれ、「人間関係のフラット化傾向」であれ、ア系列のソ系列への「くいこみ」がここ 40 年をかけて若年層から徐々に進行しているという中村（1994）の報告と考え合わせ、この現象のそもそもの原因（おそらくは社会形態の様々な変化）を調査する。

c. 問題の世代を追跡調査し、彼らの特異なふるまいの要因を引き起こしたものが本当にコミュニケーション・メディアの劇的変化や使用期間にあるのかを特定し、今後も他世代と異なり続けるのか否かを調べる。

d. 話し手に直接体験に基づく知識があっても、相手の直接体験に基づく知識の方が豊富である場合のソ系列・ア系列の選択を調査してその基準を特定し、場合によっては、金水理論に修正を加える。

5.3. 本研究の意義と今後の課題

本研究は、言語運用の実態を心理学的手法で調査・分析し、その結果を心理学と言語学の観点から考察した学際的研究である。こうした学際的研究を試みたのは、極めて複雑な人間の言語運用の本質を吟味・検討するためには、言語使用者の内的要因に焦点を置く心理学だけでも、言語自体に焦点を置く言語学だけでも不十分だと考えたためである。

本研究により、単に若いほど「誤用」が多いのではなく、新しいコミュニケーション・メディアの普及と言語運用を習得する発達段階が重なった世代で、その利用期間・頻度ともに

最も多い 25～29 歳の若者に「誤用」が多いことが明らかとなったことは、重要な心理学的知見である。また、言語学的考察の結果明らかとなった 25～29 歳の若者の「自他同一視傾向」あるいは「人間関係のフラット化傾向」という特性は、言語使用者の特性に重きを置く心理学の観点から見ても、極めて興味深いものであった。

また、本研究から、統制したつもりで作成した言語材料でもかなり回答傾向が異なることが明らかとなり、その原因を深く考察することができたことは、言語学の観点からも、極めて意義深かった。実際、これが可能となったのは、実際に調査を実施して回答傾向が異なることが明らかになったからこそであり、言語材料の単なる分析ではこうした考察をすることはできなかったはずである。その意味でも、心理学的パラダイムと言語学的考察を融合したこの学際的研究は成功だったと言える。

本研究を通じて明らかとなったのは、思春期に新しいコミュニケーション・メディアが爆発的に普及したコホート（特定の時代の同年齢集団）の言語運用が、他のコホートと異なることである。

今後、これが確かに新しいコミュニケーション・メディアの影響なのか否か、そのために彼らが「自他同一視傾向」あるいは「人間関係のフラット化傾向」という独特の特徴を有しているのかを明らかにするためには、是非とも、年代差と世代差を分離しうるコホート研究を行う必要がある。コホート研究を行えば、その他の様々な疑問、例えば、40 代が最も規範意識が高かったのが年代差なのか世代差なのか、50 歳以上の回答が想定された回答と異なったのが果たして Web 調査という新しいパラダイムに起因したのか否かを含めて、より多くの疑問を解決することができると確信する。

引用文献

- 愛知県中央県民生活プラザ (2003). 携帯電話・PHS に関するアンケート調査報告, <http://www.pref.aichi.jp/kenmin/shohiseikatsu/monitor/keitai/result1.html>
- 文化庁 (2006). 平成 17 年度「国語に関する世論調査」の結果について, http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h17/kekka.html
- 文化庁 (2007). 平成 18 年度「国語に関する世論調査」の結果について, http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h18/kekka.html
- 文化庁文化部国語課 (1998). H9 年度 国語に関する世論調査 大蔵省印刷局
- 文化庁文化部国語課 (1999). H10 年度 国語に関する世論調査 大蔵省印刷局
- 文化庁文化部国語課 (2000). H11 年度 国語に関する世論調査 大蔵省印刷局
- 文化庁文化部国語課 (2001). H12 年度 国語に関する世論調査 財務省印刷局
- Clark, H. H. (1993). *Arenas of language use*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Downes, W. (1984). *Language and Society*. London: Fontana.
- Fauconnier, G. (1982). *Mental Spaces*. Cambridge: MIT Press.

- Happé, F. G. E., & Frith, U. (1996). The neuropsychology of autism. *Brain*, **119**, 1377-1400.
- Holmes, J. (1992). *An Introduction to Sociolinguistics*. New York: Longman.
- 池田謙一 (編) (2005). インターネット・コミュニティと日常世界 誠信書房
- Ikeda, K., & Kobayashi, T. (2004). *Making democracy work via functioning of heterogeneous personal networks: Empirical analyses based on Japanese election study*. Paper prepared for the “International Social Capital Conference; Institutions, Organizations and Communities” held at Tunghai University in Taiwan on December 12-14, 2004 (池田, 2005 より).
- 伊藤恵子・田中真理・細川徹 (2004). 指示詞コ・ソ・アの理解における発達の変化 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **52**, 223-236.
- 金水敏・田窪行則 (1996). 日本語指示詞研究史から／へ 金水敏・田窪行則 (編) 日本語研究資料集 1: 指示詞 ひつじ書房 pp. 151-192.
- 金水敏 (1999). 日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について 自然言語処理, **6**(4), 67-91.
- 久野暉 (1973). 日本文法研究 大修館書店
- 黒田成幸 (1979). (コ)・ソ・アについて 林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会 (編) 林栄一教授還暦記念論文集: 英語と日本語と くろしお出版 pp. 41-60.
- 東京大学大学院情報学環編 (2006). 日本人の情報行動 2005 東京大学出版会
- 水野りか (2001). 隣接科学と心理学 梶田正己 (監) 学ぶ心理学生かす心理学 ナカニシヤ出版 pp. 158-164.
- 中村祐理子 (1994). コソアドの移りかわりーア系がソ系の領分にくいこんできた 40 年 (現代語のゆれ〈特集〉) — (文法 1 (名詞)) 国文学解釈と鑑賞, **59**(7), 50-59.
- 坂原茂 (1996). 英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係 認知科学, **3**(3), 38-58.
- 迫田久美子 (2004). 指示詞コソアの正用と誤用 言語, **33**(11), 130-131.
- 総務省 (2007). 平成 19 年版情報通信白書, <http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h19/index.html>
- 鈴木康平 (1982). 自我のめざめ 久世敏雄 (編) 青年の心理 福村出版 pp. 20-28.
- 社団法人電気通信事業者協会 (2007). 携帯電話/IP 接続サービス (携帯)/PHS/無線呼出し契約数, <http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html>
- 田中優子・神尾陽子 (2007). 自閉症における語用論研究 心理学評論, **50**, 54-63.
- 山下栄一 (1982). 青年期のとらえ方 藤永保・三宅和夫・山下栄一・依田明・空井健三・伊沢秀而 (編) 青年心理学 有斐閣ブックス pp. 2-10.
- Yoshimoto, K. (1986). On Demonstratives KO/SO/A in Japanese. 言語研究, **90**, 48-72.
- 吉本 啓 (1992). 日本語の指示詞コソアの体系 金水敏・田窪行則 (編) 日本語研究資料集 指示詞 ひつじ書房 pp. 105-122.

(2007 年 10 月 29 日 受理)